

ロビンさんの  
音楽  
エッセラービー ④

Beautiful Places

「美しい場所」

北米 モニュメントヴァレー  
Monument Valley in North America.

南米 アマゾン  
The Amazon in South America.

アフリカ ナミブ砂漠  
The Namib desert in Africa.

中国 桂林  
The Guilin mountains in China.

琉球 八重山諸島  
The Yaeyama islands in Okinawa.

僕が君に初めて出会った場所  
The land where I first met you

1万年の昔、  
Ten thousand years ago,

この星で  
The star

再び僕らが会おうはずの場所  
Where we'll be together again

100万年の彼方…  
A hundred thousand years from now...



●ロビン・ロイド (ミュージシャン・音楽セラピスト)  
イリノイ州 (USA) 出身。大学卒業後、アジアを拠点に活動。50カ国以上を旅し、そこで出会う原生林や熱帯雨林、山や川、砂漠、鳥の声、動植物などからインスピレーションを得る。カリンバ、笛、尺八、三線、パーカッションなどさまざまな民族楽器に囲まれ、マルチ・プレイヤーとしての評価が高い。お年寄りや障がいのある人たちのための音楽セラピーの実践と普及にも努めている。  
<http://www.robbin-muse.info/index.html>

どっちが年寄り

視点を一つに固定してしまうと、通じる話も通じなくなる。

先日、電車で小学校3年生の男の子に席を代わられた。聞いてみると72歳のおじいさんと同居しているらしく、私はそのおじいさんより年寄りに見られたらしい。「髪の毛が白いから」というのが、彼の年寄りの基準だった。

「髪の毛が白くなるのと同じように、年をとったら変わるものが他にはなにがあるか知ってる?」と私。「わからない」と少年。「顔のしわも年をとると出てくるね」「おじいちゃんの顔、しわしわ」「眉毛が長くなったり、耳の穴から毛が生えたりするのもお年寄りのしるし」「おじいちゃんの耳から毛が生えてる」「耳が聞こえにくくなったり、目が見えにくくなったりもするね」「おじいちゃん、テレビの音すぐに大きくする」

「さあ、君のおじいさんとおじいさんのどっちが年寄り?」。そこで彼は気づく、髪の毛だけが

高齢化のシンボルでない

コミュニケーションは  
しなければ、ほんとうの

多様な視点をもって  
意思が通じ合わない。



●石田 易司 (いしだ やすのり)  
桃山学院大学社会学部社会福祉学科教授。1948年生まれ。京都府立大学文学部政学部卒業。京都府立木津高等学校教諭を経て朝日新聞社入社。厚生文化事業団で社会福祉・青少年育成事業を担当。1998年から現職。その他、大阪市いきいきエイジングセンター館長、大阪市ボランティア情報センター所長、日本キャンプ協会常務理事、日本福祉文化学会副会長など。



Column 連載エッセイ

心の叫びをさらりと書く。  
イケメン哲学者、軽矢大輔君

ゆきえ先生の  
明るい  
教室出席簿 ④

軽い発達障がいにはありますが、シャイで無口な軽矢大輔君は、みんなから「大ちゃん、大ちゃん」と、とても人気があります。(背が高く、イケメン



で、かっこいいからでしょうか) 作詩、作曲をすると聞いていたので、自分の想いの丈をこの紙(全紙・約140cm×70cm) いっぱいに書いてみましょうか?というのが、きっかけだったと思うのですが…

15分程じっと考えた後、おもむろに筆をとって全紙に直接(下書きもせず)一気に

書きあげる。見ていて圧巻です。

9年前(2003年10月)朝日新聞のアサコムホールでの彼等の作品展での事、彼の作品の前で、毎日、何人かの人泣いているのです。ハンカチで目頭をソッと押さえる人、目をまっ赤にして、その場から小走り立ち去る人、半切(約140cm×35cm)三枚に書かれた作品です。私はあえて、受付の前にその作品を展示しました。一般の人の反応を見たかったのです。作品展に出品するものを選んでいる時、三枚に書かれたその作品を前にして、私は涙が止まりませんでした。人を好きになっても告白できない心情を、季節の移ろいととも切々と綴ったものでした。自然の移ろいを体全体で受け止めながら、繊細すぎるその感性で、心の叫びを筆に託す。だからこそ切ないまでに観る人の心を捉えてなりません。

その彼は、ここ2年、教室に顔を出していません。就職したのです。すごい事です。この大きな変化によって彼は、これからどんな作品を書くのか。ワクワクしながら待っています。



●山下 雪枝 (やました ゆきえ)  
書道教室「蛭」主宰。1949年生まれ。書家・古谷蒼韻に師事するも33歳の時に変形性股関節症のため右足を手術、約1年の入院の後、松葉杖の生活となり師事を断念。10年間の痛みとの闘いの後、1994年より書や墨アートの創作のかたわら自宅で書道教室を開く。2002年より豊中市蛭池公民館で書道教室「蛭」を主宰。10年にわたって知的障がいのある人たちと歩み続けている。

木島英登の

空飛ぶ車イス④

車イスの先陣競争、  
負けても大丈夫。

欧州でのサッカー観戦。長友選手が活躍するインテルのスタジアム「サンシーロ」は、車イスであっても簡単に見ることができる。200席以上のスペースがあるため、試合の日に訪れれば良い。車イスは介護者1名と共に無料で入れる。欧州で多い制度である。

8万人のスタジアムが満席になるミラノダービーでも無料なのか? 試合が始まる2時間半前に行き並ぶことにした。この5年前に観戦したサンブドリア戦は空いていたが、ダービーは違った。既に100台



以上の車イスがゲートの前でボールポジション争いをしていた。街では車イスはあまり見ないのに。

ゲートが開いた瞬間、車イスでの押しあいが始まった。醜い争いだが負けてられない。座席を確保しようと私も必死に肘を使って押し返す。バックスタンド最前列が全て車イス席。どこに座ってもいいがすぐにスペースは埋まった。あぶれた車イスの観客が出てきた。しかし彼らは家に帰れとは言われない。通路にはみ出して観戦をしていた。規則は守らなくてルーズだけど、融通の効くイタリア。優しさを感じる。狭くなるけど誰も文句を言わない。みんな試合が見たいもん。障がいがあるとなかろうと関係ない。一緒に騒ぐだけ。キラ星のように輝く選手のプレーと地響きのような歓声に酔いしれた。

●木島 英登 (きじま ひでとう)  
ビッグ・アイ国際交流アドバイザー。  
世界100ヶ国以上を訪問。車イスの旅人。  
<http://www.kijikiji.com/>

